

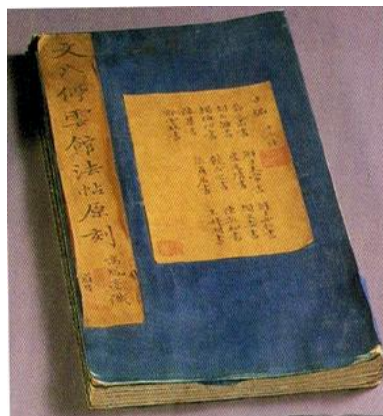
法帖の流行

法帖とは、書の真蹟や模本を石や木に刻し、その拓本を製本し書の手本や鑑賞に供したものであり、中国の書人の多くは法帖によって書を学び自己の書風をつくってきた。

明代中期以降、蘇州や松江などの江南の都市で官刻、家刻の法帖が広く刊行され、その結果、書の鑑賞が民間にまで広まった。

万暦30年代までの法帖の刊行は蘇州の文徵明一族の影響の下で刻されたが、万暦三十年代以降は松江の董其昌一族にとってかわられ、伝統的な歴代の名家の書蹟を刻すことから、董其昌の書と書論の喧伝のための法帖へと変化していったものも多い。

文氏一族の影響下に刊行された主な法帖には『停雲館帖』『真賞齋帖』『二王帖』『二王帖選』『淳化閣帖』の翻刻、『墨池堂選帖』『鬱岡齋墨妙』などがあり、董氏一族の影響下のものには、『戲鴻堂法書』『寶鼎齋法書』『書種堂帖』『書種堂統帖』『來仲樓法書』『汲古堂帖』『余清齋帖』『清鑑堂帖』などがあり、その他に『來禽館帖』『玉煙堂帖』『秀餐軒帖』『秋碧堂帖』『渤海藏真帖』『快雪堂法書』などがある。



ていうんかんじょう
停雲館帖
嘉靖16年(1537)～39年(1560)

停雲館帖は文徵明父子が20年余をかけて刻した明代を代表する名帖といわれている。全10巻。集帖。
他に、文徵明没後の補刻2巻(祝允明と文徵明の巻)を加えた12巻本がある。
晋唐の小楷以外は文彭と文嘉が真蹟から鈎摸し、鐫刻の名人の章簡父らがそれを刻したといわれる。
晋唐小楷、嵇康「絶交書」、萬歲通天進帖、懷素「千金帖」書譜、祭姪文稿など晋唐宋元明人の書を収めている。



げこうどうじょう
戲鴻堂帖
万暦31年(1603)
本紙27.0×13.2cm

戲鴻堂帖は董其昌の刻。全16巻。集帖。
王羲之・王献之をはじめ晋唐宋元の名蹟を多数収めている。
第16巻には「澄清堂帖」が収められ、これには王羲之の尺牘42種が刻入されている。
搨摸や刻の杜撰なところがあり、評価の分かれる法帖である。

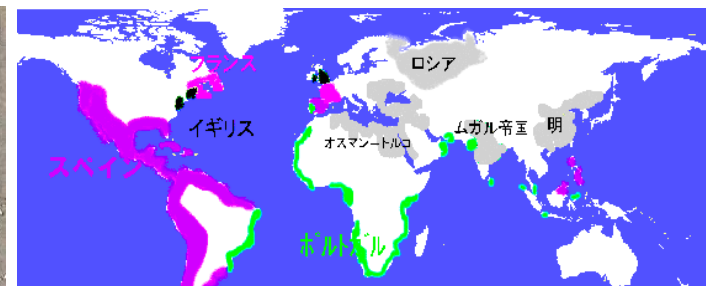
版画の出版



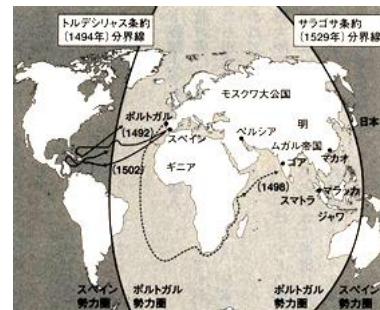
じゅちゅくさいせんぶ
十竹齋箋譜
崇禎17年(1644)刊行
21×31.5cm 全4巻 280余点
中国国家図書館蔵

明代末に彩色木版画が出版された。
「羅軒變古箋譜」は1626年に、
「十竹齋画譜」は1627年に、
「十竹齋箋譜」は1644年に、刊行。
「十竹齋画譜」「十竹齋箋譜」は安徽の胡正言によって刊行された。
十竹齋とは版画家胡正言の南京の家の名である。
胡正言は多くの木版水印の版画をつくり、それを精選して「十竹齋画譜」と「十竹齋箋譜」を編集した。
これらは明末清初の版画の傑作といわれ、日本の浮世絵などにも大きな影響を与えた。

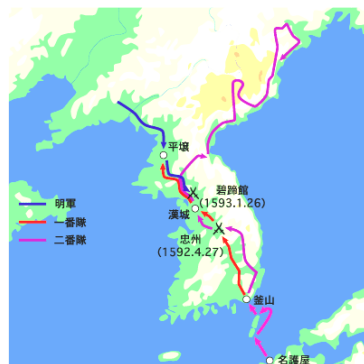
明朝の滅亡



16 世紀後半から 17 世紀前半の世界の領土



ポルトガルとスペインの世界分割線



文禄の役 (1592-1596 年)



慶長の役 (1597-1598 年)

西欧による世界侵略（大航海時代）

明朝滅亡の前後は、日本史と東洋史と世界史が初めて密接に絡み合っ世界が動いた時代であった。

ヨーロッパ世界の拡大はポルトガルのインド航路開拓事業から始まり、それに対抗したスペインにより世界争奪戦（領土のとりあい）がくりひろげられた。1481年、教皇シクストゥス4世の回勅でカナリア諸島以南の新領土は、すべてポルトガル領であると定められた。スペインはそれに不満であった。

1492年コロンブスが西インド諸島に上陸してから新大陸に対する冒険が両国でブームとなり、さらに両国の争いが激しくなってきた。紛争を解決するため、1494年両国間でトルデシリャス条約が締結された。

この条約はベルデ岬諸島の西方約1770 kmの地点を通る子午線で東西に分割し、西側をスペイン、東側をポルトガルの領土と定めたもので、ローマ法王の権威によって認められた。

アジア地域は1529年のサラゴサ条約により東西に二分され、主としてポルトガルはアフリカと東南アジアなどを、スペインはブラジルを除く新大陸やフィリピンなどを領有した。この結果、日本も二分され、1543年にポルトガル人が日本に鉄砲を伝え、1549年にスペインのフランシスコ・ザビエルが布教のため渡来し、日本はポルトガル、スペインと交流することになった。やがてスペインは南ヨーロッパ、中南米を支配し、1571年オスマントルコを破り、ポルトガルを併合した。十七世紀になるとフランスや新教国のイギリス、オランダが条約を無視して領土獲得のため世界に進出してきた。

スペインの援助を受けたコロンブスは数百万のインディオを虐殺した。スペイン人のコルテスにより1521年にアステカ帝国は征服され、その後百年間に二千万以上の先住民が虐殺された。スペイン人のピサロはインカ帝国を征服し、半世紀の間に一千万ものインディオを虐殺した。

ポルトガル人によって始められたアフリカの黒人奴隷売買はスペイン、オランダ、フランス、イギリスに受け継がれ、奴隷の搾取から得た富がイギリスの産業革命やヨーロッパ発展の礎石となった。

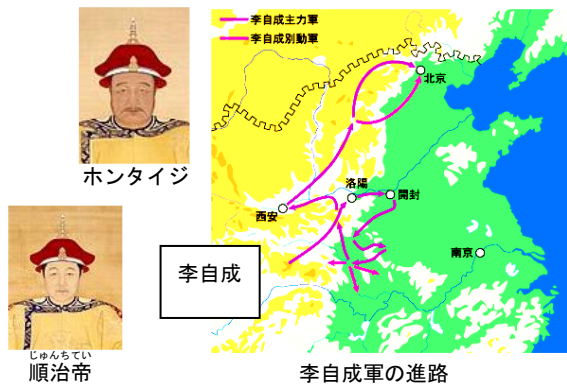
東アジア国際戦争（文禄・慶長の役）（壬申・丁酉倭乱）（万曆朝鮮の役）

西欧の地球分割支配がしだいに日本に迫ってきた頃、豊臣秀吉は西欧に先んじて明朝を倒し、天皇を北京で皇帝に即位させようと企み、朝鮮の李氏に協力を頼むために千利休などを使者として送ったが失敗し、1592年（文禄元年・万曆20年）日本軍は朝鮮の侵略をはじめた。（文禄の役）

李氏朝鮮軍は初め劣勢であったが、明の援軍や民衆のゲリラにより次第に優勢になった。1593年秀吉は休戦命令を出し、講和交渉で逃れようとしたが失敗し、1596年（慶長元年）再び出兵した。（慶長の役）1598年（万曆26年）伏見城で秀吉が病没し慶長の役は終結した。

この戦争は勝者なき戦いであったと言われている。戦後、豊臣政権は崩壊、朝鮮王国は弱体化し半島は荒れ果て、明朝は十万人の戦死者、莫大な軍事費がかさみ、国力を落とし、後金の反乱をまねき、侵略を受け、滅亡の坂を転がっていった。

秀吉は織田信長の遺志を継ぎ、フィリピンやマカオやゴアなどのポルトガル領やスペイン領を支配下に入れ、世界を征服しようと夢みていたようである。



内乱から滅亡へ

明朝は万暦の中頃（1590年頃）から内憂外患に苦しむようになった。「文祿の役」の年の1592年（万暦20年）明軍のモンゴル人ボハイが寧夏（中国西北部）で反乱を起こした。「ボハイの乱」明朝の腐敗から起こったこの反乱はボハイの自害により半年ほどで平定された。同じ頃、貴州播州（中国西南部）の小豪族の楊応龍が、朝鮮援兵に乘じて反乱を起こした。「楊応龍の乱」「苗族の反乱」乱は1601年（万暦29年）楊応龍の自殺により収束した。

これらの戦争や反乱の鎮圧のため莫大な軍事費が投じられ、明の財政に大打撃を与えた。第14代皇帝万暦帝（神宗・在位1572 - 1620）は財政悪化に対応するために増税し、また銀山開発のために、宦官を地方に派遣して民衆を徹底的に搾取した。そのために、追いつめられた民衆による内乱があちこちで起こった。（民変）

暗愚な皇帝は、贅沢三昧の生活をやめず、後半生の25年間は後宮にこもって愛姫鄭貴妃と酒色にふけり政治を顧みなかった。派遣された宦官たちも民衆を収奪し私腹を肥やし、たびたび民衆により殺害された。さらに朝鮮援兵のため遼東方面の兵力を朝鮮に向けた隙に満州族の勢力が拡大し明朝滅亡の遠因となった。

王朝内部では党争が激化した。

万暦帝と宦官を批判し朝廷から追放された顧憲成が東林党の指導者になり政府を批判した。東林党は一時は政権を握ったが（15代泰昌帝は即位後一ヶ月で死去）16代天啓帝の時、宦官の魏忠賢が暗愚な皇帝をまるめこんで専横を極め、東林党は激烈な弾圧を受け、政府を宦官たちが牛耳ることになったが、17代崇禎帝の時、魏忠賢ら反東林党は罪を糾弾され失脚、魏忠賢は首を吊って自殺した。再び東林党が復活、こんどは東林党による反東林党への弾圧が行なわれ、さらに両党の争いが続いた。

この争いの最中に、東北では満州族（女真族）のヌルハチ（愛新覚羅・努兒哈赤）が1616年明から独立、「後金」を建国し北京に進撃したが、ヌルハチは明軍のポルトガル製の大砲により負傷し亡くなった。

1636年ヌルハチの八男のホンタイジ（愛新覚羅・皇太極）が後を継ぎ、国名を「清」と改めた。

ホンタイジは1637年李氏朝鮮を服属させ、内モンゴリアを支配下に置いて明に向かったが山海関を落せず1643年に急死。6歳の息子（清の第3代皇帝順治帝・愛新覚羅福臨）が後を継ぎ、実権を叔父のドルゴンが握った。

そのころ、農民反乱軍に加わった陝西出身の李自成はたちまち頭角を現し闖王となり、1641年洛陽、続いて開封、西安を落とし1644年西安を都として国号を順（大順）と定め、西安で順王と称した。4月北京に40万の大軍で無血入城、崇禎帝は紫禁城の裏山の景山で首を吊って自殺し、ここに明朝は滅亡した。

だが、山海関を守っていた明の將軍呉三桂は清軍に寝返り山海関近くで李自成軍と激突、敗北した李自成は北京に逃げ帰り皇帝に即位し、紫禁城の財宝を持って西安へ、つづいて通城（湖北省）へと逃れるが1645年九宮山で農民により殺された。清軍は6月ころ北京に入場したので、李自成の天下は40余日で終わったが、しかし、明の皇族によって亡命政権の南明が立てられ争いはまだつづいた。李自成的残党は南明の傘下で1664年まで清朝に抵抗を続け全滅した。



倪元璐像

倪元璐 (1593~1644) (万暦21年~崇禎17年)

浙江省上虞の人。字は玉汝、号は鴻宝、園客、諡は文正、文貞。明朝の高官。天啓2年(1622年)進士に合格。戸部尚書兼翰林院學士。博学で忠義に厚く、剛直な人柄。崇禎帝の自死後、みずから縊死し明朝に殉じた烈士。詩文書画にすぐれ、著書は『倪文貞集』など。行草書が得意で顔真卿や蘇軾を学んだ。山水竹石画が得意。山水画は倪瓚に倣い平遠山水を得意とした。

連綿長条幅の流行

明代の書は董其昌が代表するように、晋唐宋元の書の鑑賞と臨書を通じ、伝統を土台にして自己の書を完成するという方法の書人がほとんどであった。そのため、文徵明らのように、貴族的で洗練された、形体美に優れたものが多く、精神的内容は乏しいといわれ、趣味的で妍媚だが、切実な表現はほとんど見られない。しかし、明末清初の天下動乱の時代になると生死をかけた切実な書が生まれてくる。明が異民族国家清に蹂躪され亡びる過程で、明の書家は遺民と武臣とに分かれた。彼らは、いずれも巨大な長条幅を好んで書いた。

華中の抵抗運動は激烈であった。揚州では10日間で80万人が虐殺された。江陰では81日間で17万人が殺され投降したものは53人であった。特に弁髮令の強制は漢民族としての誇りを著しく傷つけ、抵抗を激化した。

国姓爺鄭成功が厦門で彼の出発を見送った。黄檗山万福寺の開祖隠元禪師(1592~1673)は福州の出身。彼は南明政権に対する軍事援助を求めて63歳のとき日本に渡ってきた。



鄭成功



隠元禪師

遺民と武臣

各地で、漢民族の誇りを守って、明の民衆や士大夫の反抗が続いていた。明朝滅亡と同時に殉死する者、僧となって寺院にこもった者、日本などに亡命した者、一族で高山に登り隠遁した者など、清朝の支配に抵抗しつづけたこれらの人びとを遺民という。

満州族は人口60万で内兵隊が15万人といわれる。こんなに少数の満州族が多数の漢民族を支配するために、清朝は、中国支配の正統性を示そうとして、崇禎帝のかたき討ちのために李自成を倒したのだと宣伝し、崇禎帝の御陵も造営した。また、明の官僚で清朝への復帰を望む者を喜んで受け入れた。両朝につかえた人びとを武臣という。武臣は人びとから軽蔑された。



南明の四王の位置図

南明

1644年3月、反乱軍により北京が陥落し明朝は亡び、4月満州軍が北京を占領し李自成は殺されたが、漢民族の抵抗はあちこちでつづいた。副都南京の官僚たちは南に逃げていた皇族を立て亡命政権を起した。1644年から1661年までの間に華中、華南に建てられた4人の王の亡命政権の総称を南明と呼ぶ。彼らの大義は反清復明であった。

最初の亡命政権は、1644年5月に南京にできた福王政権であったが、腐敗したこの政権は1645年4月、清軍により南京が陥落し崩壊した。5月、紹興に魯王政権が、福州に唐王政権が成立したが、翌年8月二政権とも崩壊、10月に広東の肇慶に桂王政権が成立。この政権は15年間続いたが、1661年、呉三桂によって桂王が殺され崩壊した。

鄭成功による大陸最後の抵抗

1659年、厦門の鄭成功と舟山列島の張煌言が明遺民たちと一緒に南京を攻めたが清軍に撃退され、鄭成功は台湾へ渡り1662年病死、張煌言も1664年に逮捕されて殺され、南明の大陸での抵抗は終わったが、その後も鄭成功の遺族によって鄭氏台湾の抵抗はつづき、ようやく1683年になって鄭氏は降伏し、反清活動は完全に収束した。



部分
西風

けんぽん
絹本 188×40 cm 東京国立博物館蔵
七言絶句一首が書かれている。
短鋒の禿筆（とくひつ）で擦りつけるようにして運筆されている。
短鋒だから墨がすぐ無くなり潤渴の変化が極端に出ている。
激しい感情の表現ではあろうが、冷静に計算された造形思考もまた感じられる。
線質は猶勁で、余白は山水画のように美しい。
字粒はやや小さく求心的だが、強い力を蔵しているようだ。
知性によってコントロールされた、激烈だが冷徹な書である。

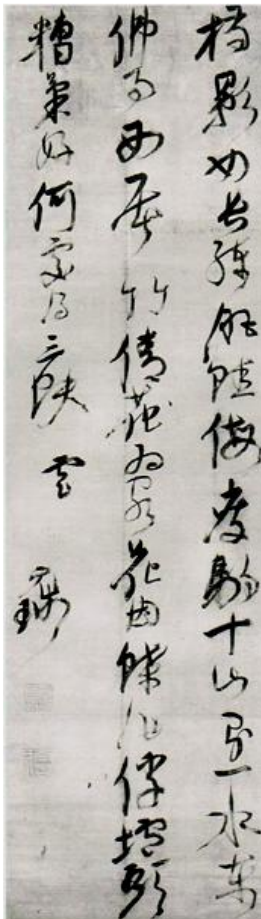


行草七言絶句軸



部分 花 花 一水

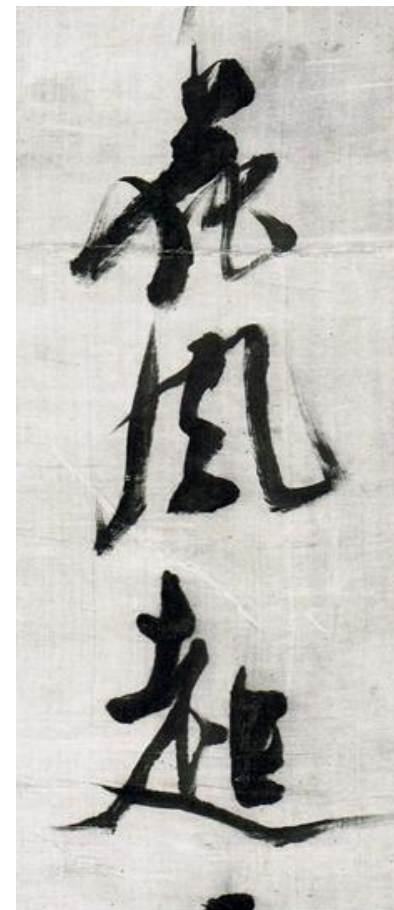
絹本 161.0×46.3 cm



行草五言律詩軸

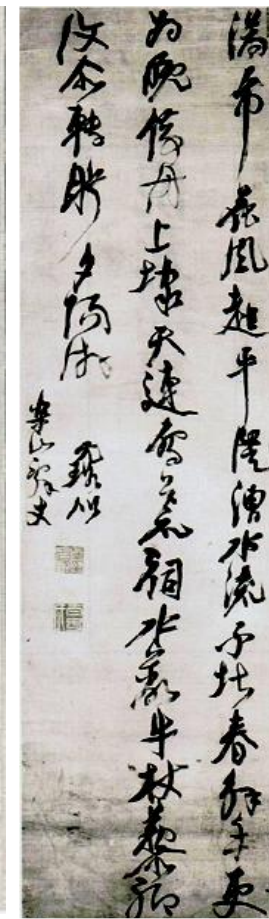
東京国立博物館蔵

五言律詩一首が書かれている。
行の揺れは穏やかである。行間の白が輝いている。
同字は書き方に変化をつるなど、知的な工夫の書。
潤渴の対比も計算されている。
連綿はほとんど無い。



部分 花風起

こうほん
絹本 165.0×47.3 cm



行草五言律詩軸

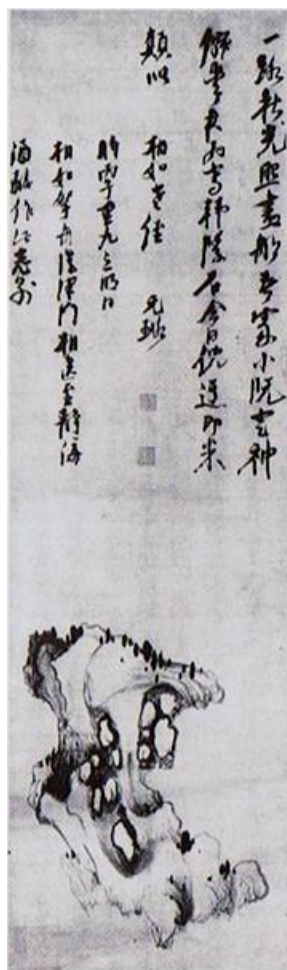
東京国立博物館蔵

楽山に五言律詩一首を書き贈ったもの。
右肩上がりの字形は黄道周と共通している。揺れながら行が構成さ、行間、字間の余白が輝いている。連綿は少ない。
激しく鋭い気性。側筆と直筆。鋭い露鋒と穏やかな蔵鋒の対比。
短めの剛毛筆を使っているようだ。



こぼくせきちくず
枯木石竹図 1638年 広東省博物館蔵
続本 112.5×47.5 cm

石は信頼の、古木は忍耐、松柏は節を曲げないことの象徴として描かれている。君子の象徴である蘭（清らかさの象徴）が手前に、石の脇には竹（苦難にも屈しない節操の象徴）が描かれている。



ぶんせきず
文石図 1636年 続本
約 156×47 cm 大阪市立美術館蔵

倪元璐は奇石をたくさん描いている。奇石の中に山水や自然の形象を見、また信頼の象徴をも見ていたようだ。



部分 野園無

紙本? 155×55 cm

短鋒で一字ごとに墨つぎをしているのだろう、一字の中に潤渇がある奇異な書であるが、書かれている詩は、朝の清しい風に吹かれ、野の庭園を動き回る、細くてしなやかな美しい娘の姿である。

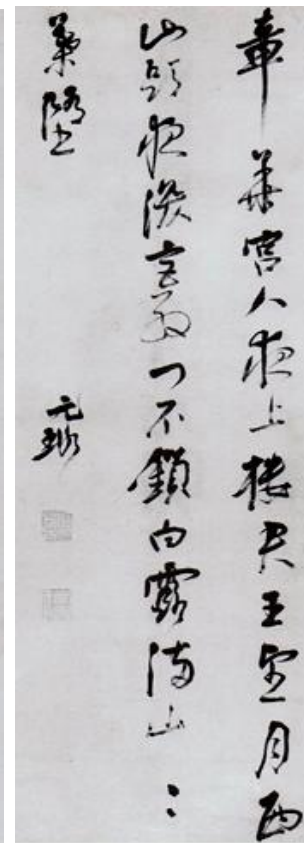


行草七言絶句軸



部分 章華

紙本 134×50.8 cm

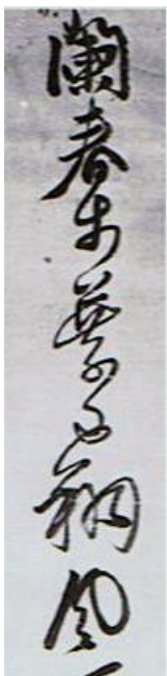


行草七言絶句軸

東京国立博物館蔵

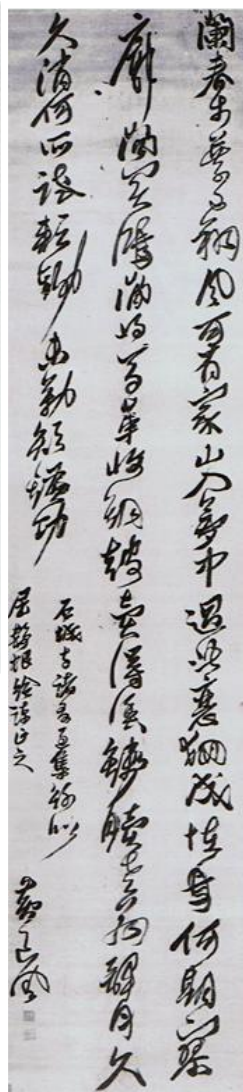
紙に書かれているためか、ごつごつした感じがあまりなく、柔らかく落ちついた印章を受ける。同じ字には変化をつけ、文字の大小の変化も計画的に一字一字丁寧に書かれている。

倪元璐は宦官魏忠賢の勢力に対して強く攻撃したそう。黄道周の友人なら当然であるだろう。



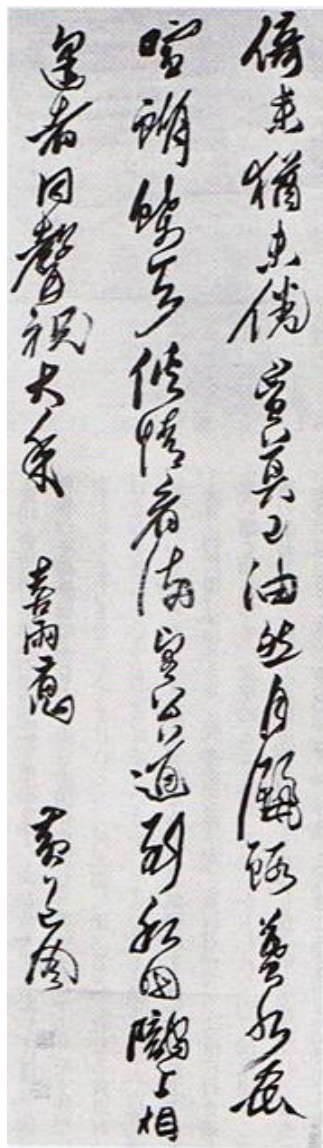
部分

黄道周の書は遒媚で、秦篆漢隸また章草の筆意を含んだ、右肩上がり強い連綿草が特徴である。



草書七言律詩軸

純本 236×53 cm
東京国立博物館蔵



喜雨詩（五言律詩）軸

173.8×49.8 cm 北京故宮博物院蔵

1644年（明の滅亡後）、明の皇族の福王が南京で即位し亡命政権の南明が誕生した。黄道周は福王に招かれ礼部尚書に就任した。翌年4月、清により南京が陥落し福王は殺された。6月、魯王が紹興に、唐王が福州に立った。黄道周は唐王のもとで武英殿大学士となり、明室回復のため清軍と戦ったが、12月に捕らえられ1646年3月南京（当時江寧）の獄中で絶食して殉死した。

黄道周（1585～1646年）

福建漳浦の人。字は幼元、号は石齋、諡は忠端。倪元璐と同年の天啓二年（1622年）に進士に合格。倪元璐の友人。明朝の高官。東林党の指導者の一人で反魏忠賢の闘争に参加した。剛直清廉の人柄と伝えられる。詩文書画に優れ、著書に『易象正義』などがある。書は楷行草を能くし、鍾繇・張芝・王羲之を重んじ、長条幅の連綿行草書を得意とした。



秋景山水図 静嘉堂文庫蔵

倪元璐の山水画は呉派や趙孟頫、元末四大家の影響を受けているようである。

「山水図巻」は倪瓚を倣ったものという。

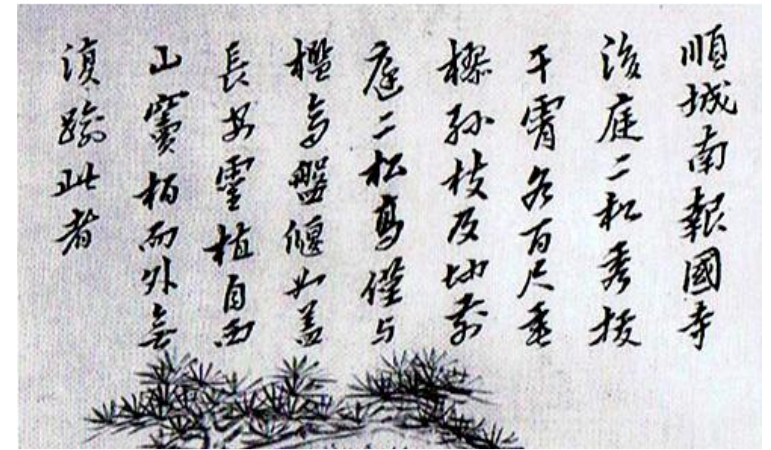


山水図巻 部分 1629年 純本 26.4×317.2 cm 京都国立博物館蔵

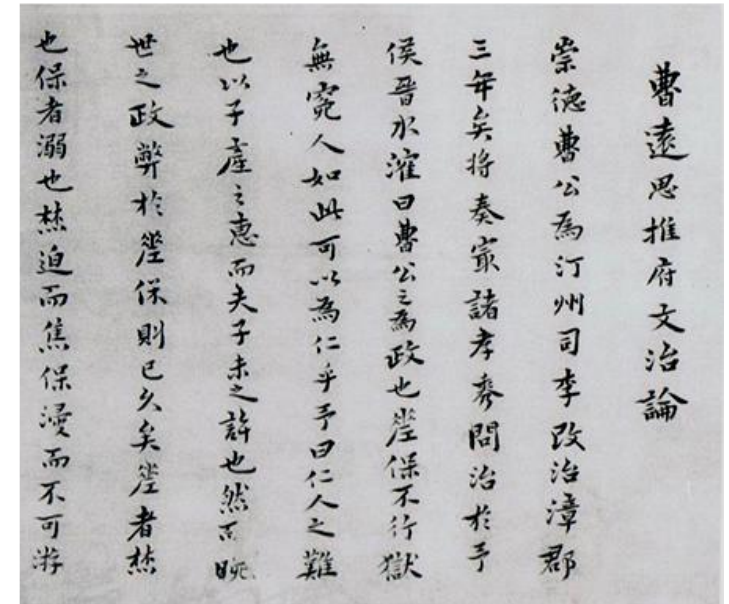


松石図 80.9×58.1 cm

書法と画法が結びついた作品。松と小さな樹と石が簡潔な筆墨で描かれている。それぞれのモチーフには象徴的な意味があるようだ。画面右上の自題には、「松豈無骨石亦有姿、惟致二者是謂相知」と書かれている。



松石図自題 「松石図巻」 27.3×232.2 cm 大阪市立美術館蔵



曹遠思推府文治論 1644年 紙本 25.9 cm 京都国立博物館蔵
1644年の8月頃に山中で書かれたようである。隸意を帯びた楷書。



山水図 1635年 絹本墨画
112.8×38.6 cm
京都国立博物館蔵

黄道周も倪元璐と同じく松や石を多く描いたようである。松石が不屈の精神の象徴であったからであろうか。

おうたく
王鐸（1592～1652年）（万暦20年～順治9年）河南孟津（洛陽）の人。

字は覚斯、号は高樵、十樵、癡庵、癡僊道人、石樵、など、斎号を擬山園、琅華館などと称した。諡は文安。詩文書画にすぐれ、詩文集に『擬山園初集』が詩集に『擬山園選集』がある。刻帖に『擬山園帖』10巻、『琅華館帖』がある。

天啓2年（1622）、倪元璐と黄道周と同時に進士に合格し、共に翰林院に入り仲よく学問に励んだといわれる。※「翰林院」とは学芸に関する教育・研究機関の呼称。「翰」は筆のこと。「翰林」は学者、文人の仲間の意。

明朝滅亡に臨んでの倪元璐と黄道周の最期は見てきたとおりだが、王鐸は明と清の二朝に仕え、両朝ともに礼部尚書（文部大臣のような地位）にまで至り、生き延びたが、役人の仕事らしい仕事もせず郷里で病没した。

「書は人なり」「文は人なり」を価値の基準とする旧中国では、王鐸は、恥知らずな武臣として蔑まれ、政局に疎く、無能の官僚とバカにされ、その詩も書画も無視されてきた。その学芸の業績が正當に評価されたのは近年になってからのことである。

王鐸は少年のころから二王（王羲之と王献之）、米芾などを学び、生涯にわたって『淳化閣帖』の臨模に励み、特に二王を手本とした。彼の言葉に「一日は帖文の臨模、一日は自由に書をかく」がある。

彼は王献之の一筆書を独自の連綿長条幅に発展させ、一家をなした。

彼の書は、自運（創作）の作と臨書作品とに大別できる。臨書は二王の尺牘など多数にのぼる。その臨書は意臨に徹している。書風は王法に倣った優雅なものと、顔法に倣った雄健なものに大別できるという人もいる。

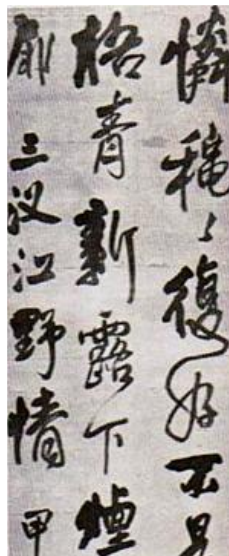
※「長条幅」とは、約136センチ以上の条幅をいう。



王鐸 山水図 1637 年
紙本墨画 藤井有鄰館蔵

王鐸は巨然や董源を学んだといわれるが、はっきりしない。表現はやや硬いが、迫力のある大画面である。

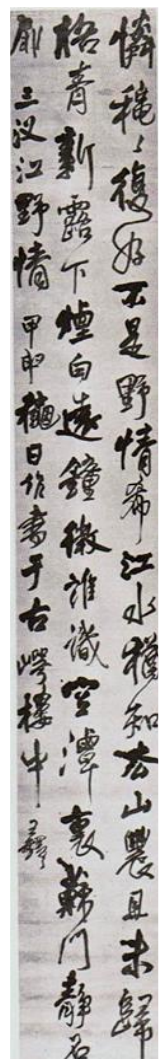
明朝の崩壊直前であっても、王鐸は巨然の絵を悠悠と鑑賞していたようである。



部分

たいへん長い条幅である。墨法が水墨のようである。行書では連綿はほとんど見られない。

明朝が滅亡した年の秋に、南京の亡命政権のもとで書かれている。次の年の夏、清によって南京政権は崩壊し、王鐸は清に降伏し出仕した。



さんさのやじょうのし
三汊野情 詩軸

1644 年 53 歳
紙本 334.5×45 cm
東京国立博物館蔵



部分 春集太

清朝に降って三年目の正月に書かれた作。生活は経済的に苦しかったようだが、書は明るく、伸び伸びとした書きぶりである。戦中の暗さがかけらも感じられない。

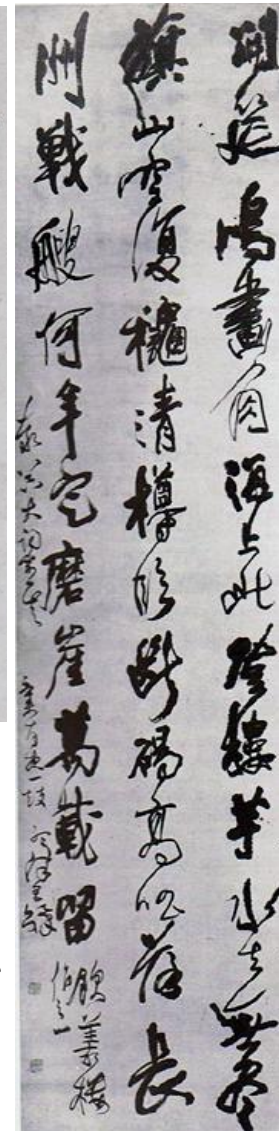


行書幅 1646 年正月 55 歳
165×52.5cm

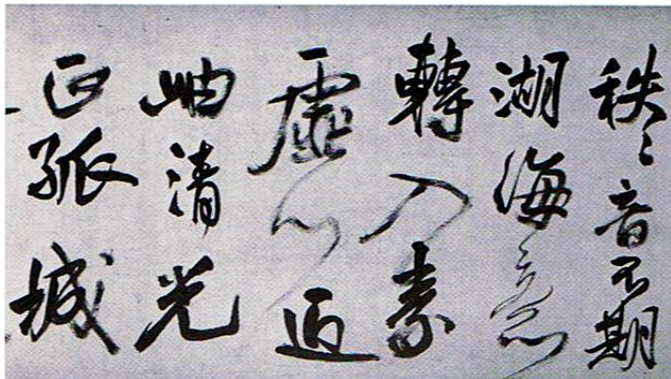


部分 無盡旗

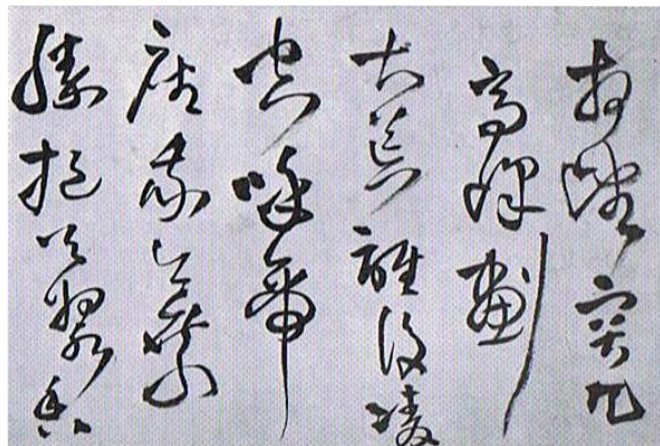
「無」は左上方へ、「旗」は下方へ墨が流れている。布を両端で持ってもらって、布が宙に浮いた状態で書かれたものと考えられている。



飲義樓詩幅 1631 年 40 歳
紙本 286×73 cm



行書五律五首卷 1642年 絹本・紙本 32×698cm 東京国立博物館蔵

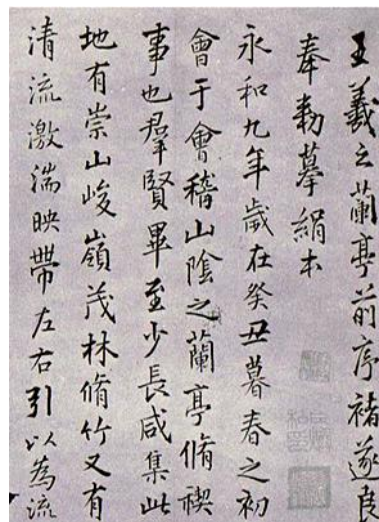


草書七律五首卷 1642年 絹本 26×469cm 東京国立博物館蔵

行書五律詩卷は自作の五言律詩五首を書いたもの。
遒勁な書。渴筆が美しい。禿筆で書いたと思われる。

草書七律詩卷も自作の七言律詩五首を書いたもの。

王鐸の作品には二王・顔真卿・米芾などの書法が息づいている。

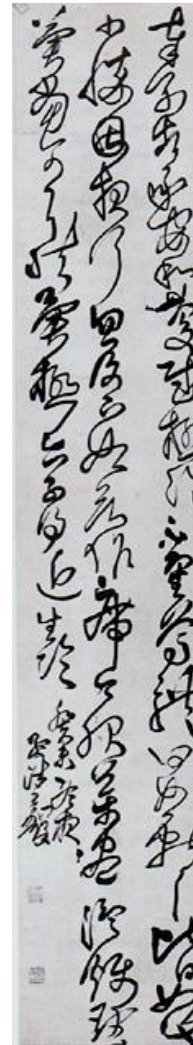


臨王羲之蘭亭序 部分 1636年
絹本 24.2×80cm 東京国立博物館蔵

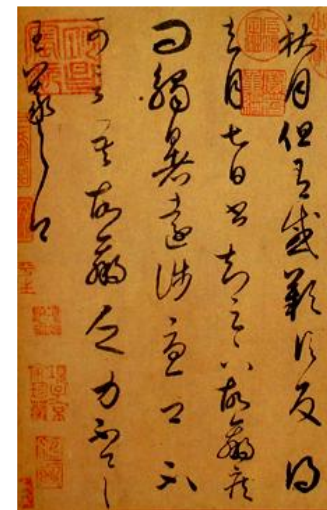
文章を暗記して背臨で書いたもの。
王鐸は生涯に何度か蘭亭序を臨書している。

「気持ちのよければ自作の詩を書き、依頼には『淳化閣帖』の一段を背臨する。」
また「書作は、一日は『淳化閣帖』を臨書し、一日は依頼の書をかいた。」ともいつているらしい。

王鐸の言葉

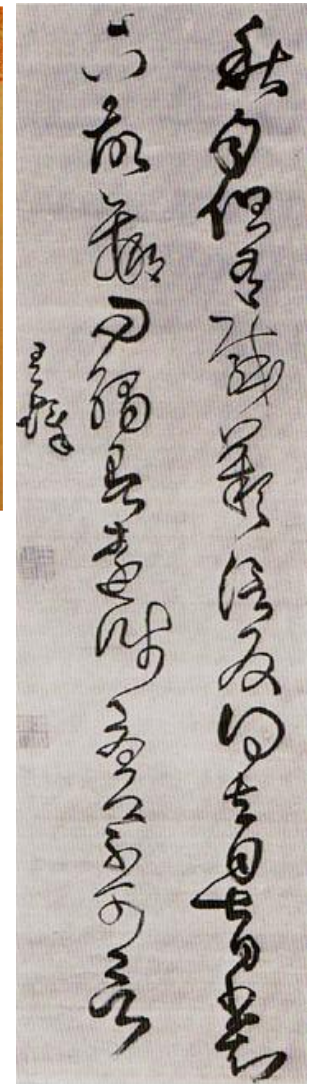


臨王献之安和帖
1643年
272.5×51cm
「淳化閣帖」第9巻の王献之の部分の臨書。



王羲之 秋月帖

王鐸の臨書は写実的なものではない。
誤字を正したり、行書の部分を草書で書いたり、配置も自由に変更している。
王鐸は自分の書の風格が落ちないように名筆を臨書してトレーニングしていたらしい。
「毎字須く写すこと一万遍に至るべし。書法のはじめは法帖に入り難く、その後は法帖を出で難し。」(王鐸の言葉)



臨王羲之秋月帖 1640年頃
絹本 186.6×51cm
「淳化閣帖」第7巻の羲之の書を臨書したもの。